



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オープンキャンパス体験講義 「人間の学としての哲学 : 東日本大震災への一教員からのメッセージ」 Vision : 心魂と科学技術文明の再定位
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 135, 139(左)-148(左)
Issue Date	2011-12-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47702
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS135-5.pdf



オープンキャンパス体験講義（2011.7.31）

「人間の学としての哲学—東日本大震災への一教員からのメッセージ」

Vision

— ^{こころ}心魂と科学技術文明の再定位 —

千 葉 恵

2011.3.11

いつもの春なら、風薫る北上や阿武隈の河原にそよぐ桜とともに故郷を思い返すのに 3.11 を境に故郷の相貌は一変した。雁の群れを従え奥羽の山脈に入る夕日に輝く平原に、秋の風が吹き、伝播する黄金色の稲穂の波、それが故郷の原風景であった。思えば異郷の地にあつて、無言のうちに養われた故郷の大地の身体的な記憶と四季織りなすその風景の想起は癒しであった。しかし、今や、故郷の大地は引き裂かれ家々は押し潰され、豊かな幸もたらず大洋のはるかな水平線は凶暴な魔物となって陸を飲み込んでしまった。辿り着いた故郷の大地は一日に百回の余震を数え、海上に浮かぶ島のように緩んでいた。

取り去られた者と生き延びた者、この両者を分かťものの正体をひとは知らない。ただ、生き死にのやりとりという一切が剥ぎ取られたところで現出する剥き出しの生、生き延びた事実がここにある。そして誰もが心の底でそれが人間の現実だということを知っている。ひとは生まれたときには死ぬのに十分なほどに年を取っていること、そしてただそれを直視することを避けて文明を着飾ってきたことを知っているからである。

一切の家財と愛する者を失った人々、彼らに遺されたものは剥き出しの

こころ
心魂であった。それでも心魂ある者はその失った事実と自己自身の生存を確認する。生きている。この限界状況にこそ日本はまず思いをいたす。その視点から来し方を反省しまた来る未来を創る。「一大事と申すは只今この時なり」という感覚のうちに常住する宗教家に似た感覚で国民は今を共有している。教育、政治等の制度疲労のうちにあった時代精神に隷属し、明日は昨日と同様に流れ来るという慣性の法則に吞まれていた日本は今覚醒を余儀なくされた。それ故に、この危機は計らずも新たな日本を創る原点となりうる。それほどに人々の心魂は揺すぶられ、虚無に服し、それ故に心魂の底で堅固な生の指針を求めている。これが100年後に起きたのであれば、子孫たちがそうであるように、当事者となったこの世代は次の世代に日本の Vision を示しそれを築く使命を持つ。

ここでは、迂遠に見えようが、「管子」の故事に倣い、穀や木を植えることに譬えられる一年や十年の計についてはその適任の向きにお任せし、ひとを樹える「終身の計」のもとに今後の日本の教育というソフト面の復興案を提示したい。幅広い若者への励ましとなるべく、美しく堅固な日本を創る美しく堅固な心魂を記したい。

日本人の与件

日本人の心性が天災により形づくられてきたことが、瓦礫の横をネクタイ占めて出勤する姿、握り飯一個に深々とお辞儀する姿、暴動も略奪もなく整然と列を作る姿の報道に対して、揺るぎない大地に住む人々から挙げられた驚嘆の声により確かめられた。堅固な大地のうえで築かれる国々とは違う自然への畏怖そして或る種の敏感さと諦観がひとびとに長年染み付いてきたことが知られる。山紫水明な八百八島からなるこの国は自然の猛威の形成物であった。その引き換えに自然の力への従順とひとの営みは結局無に帰するという無常観が歴代の DNA に深く刻まれてきた。日本はこの地質上の与件の上に築かれており、諦観や無常観も生存の知恵としての与件であるとして、そのうえで為し得る最善を実現する人格の育成は教育の目標であり続ける。

今回ほど日本人であることを一体感のなかで意識したことはあったであろう

うか。職務に生命を賭した人々、死者たちのなかにまたそのそとに自らの生命を顧みず他者を救いだした名も知れぬ多数の英雄たち、私どもは彼らの捨て身の行動に胸を熱くする。文明の産物が剥ぎ取られて生命だけが帰属した^{こころ}心魂同士に、支配も被支配もなく我と汝の等しさとしての愛がここかしこに出来事になっていた。他方、津波に飲み込まれた岸辺の小学校では、散乱した瓦礫に場違いに白いアホウドリが群がり、そのなかでランドセルを捜す力ない母たちの姿があった。彼らは問う「天災ですか、それとも人災ですか」と。

危機に露呈した現代文明の姿

天災と人災の交錯の中で大切なものとよりそうでないものの判別が明らかになってきた。高度の科学技術文明の発展のなかで見えにくくなっていたものがこの危機によりあぶり出された。近年、^{こころ}心魂そのものが科学技術に依存し、翻弄されているように思われてきたが、科学技術が破綻しても剥き出しの心魂はここにあるという当たり前の事実がはっきりした。

専門分化された時代における専門家(specialist)、これは豊かな文明社会の産物である。生活の基本が満たされたところでは、ひとは細分化された諸分野において自らの細分化された能力を発揮すべく教育を受けそして研鑽を積む。科学技術の領域ではナノスペースから宇宙空間に至るまで人間の知の対象とされ、七十兆個の細胞から形成される生体や地震のメカニズムそして宇宙の起源にいたるまで明白な知識を持つにいたった。科学技術によってこそ人類は問題を解決しようという何か人間の営みの最も光の部分として大方の称賛と信頼をえてきた。

「自然は何も無駄に作らない」(アリストテレス)のはそれが生存と繁栄という生物上の目的論的な構造のなかで必要不可欠なものの連鎖により形作られているからである。それに比し、技術が当該ゴールとの緊密な連関を失うとき、その他の動機づけに支配され、不要なもののひいては生存と繁栄を脅かすものを生みだしていく。今回、科学技術の粋の建築を冷やすべく外部から消防車が放水するという何かとても前近代的な手法に頼らざるを得ない状況

が出来た。複雑にからみあった産物のうえでは、多くの前提条件なしに、ひとは自らの専門技術をも発揮できずに、責任もとれないのである。技術は或る枠の中で設定されたゴールに対しそれを実現する最善の手段の選択に思考を集中させる。車の設計家は車社会を当然の善として前提にしたうえで、快適で燃費のよい車の考案に力を注ぐ。もちろんゴールを実現する最善の手段への集中は必要である。しかし、ゴールそのものを人間の営みという全体性のなかに置き、吟味することをしないとき、その視野狭窄、自己満足は加速されていく。当該技術が何に應用されるかを知らずに、諸技術の連関づけないときはなおさらである。技術はそれがいかに多くの暗黙の前提と帰結において成り立っているか、忘れられることにより、複雑化に応じて部品一個の不具合がバベルの塔全体を機能停止に陥らせる。この綱渡りの現状において、専門家は自らの分担に対し責任をもってそれが壊れないものだという確信を各人が抱くことによってのみ、専門の結合集積による全体はようやく壊れないものとなる。総体の総観には部分と全体の絶えざる送り返しが不可欠となる。

福島第一原発の東芝 OB 設計者による「GE 社のコピーだった」という発言は衝撃的だ。自らの分担であったのであろうが、地震と津波のこの国においてアメリカの竜巻仕様の設計図を思考停止と言いなりによりそのままコピーしたのであった。関係者は「五重の壁」を信じてきたが十分ではなかったとし、今後七重、八重の壁を作るという。比喻であれ「壁」を厚くすることしか考えないこの定量的な専門家の思考様式に対し、敏感な人は「天災よりも、人間のすることのほうが怖い」と感じるでもあろう。反省や悔い改めが帰属する心魂^{こころ}とは独立したものとして専門知が位置づけられているから、反省しようにもその関連性が見出せないのである。そのロゴスのなさがあらゆる種類のカモフラージュのなかでつけこまれ技術は支配の道具に変わる。専門知の閉塞性に歯止めをかけ方向転換する発想と力を持つ人間はいかに形成されるのか。今、科学技術文明と心魂を冷静に見つめる時である。

科学技術の中立性という神話

大航海時代のような成長神話を人類は科学技術により追求しているが、それが独り歩きするとき、一部の専門家の知識に人類全体の命運がかかることになる。科学技術はもはや道具ではなく、人間による秩序づけ不能な力となり、人類は制御不能なものに自らの生命を依拠させることになる。金融危機の折に、一企業が「大きすぎて潰せない」と言われ、量の増大が「潰れない企業」という質の変化、概念そのものの変化を余儀なくしたように、半減期が長すぎてまた多量すぎ、熱すぎて手に負えないという事態は、自然の模倣という位置づけを得ていた道具、人工物というものの概念を変えてしまった。元来カメラは目の、クレーン車は腕の応用として人間の意図の支配のもとでの自然物の模倣に留まっていた。技術はもはや制御不能な天災のごときものとして、誰も責任を負うことなく、隕石の落下のように、人類を道連れにする。一国を生存の危機に脅す燃料棒はその影響が大きすぎてもはや「人工物」とは言えない。通常の道具のように、生活という枠の中でありうる諸前提と諸帰結の中に明確に位置づけることは困難である。

この事態の背後に、ひとつには科学技術の中立性という神話がある。医療はそれ自身として中立的であり癒しにも殺しにも用いられるという理解が古来主張された。原子工学も電気にも爆弾にも利用されるが、その技術そのものは中立的なものであるとされる。原子爆弾の製造技術におけるその数式は誰にも妥当するものであると言われよう。ソクラテスはその技術の独り歩きの危険性に気づき、例えば医療はそのゴールである患者の健康との関連により秩序づけられ、決して技術がそこに向けられるその対象の善から離れてその概念は理解されないと主張した。技術の力能はその目的概念に説明言表上依存する文脈依存的なものである。力能はゴールの概念なしには不定であり、メスで真っ直ぐ切る所謂「技術」に関し、その力能はゴールである健康に方向づけられることにより「何の」力能であるか初めて同定される。単に真っ直ぐ切る「技術」は力能として不定である。一般的に理解される限りにおける「技術」の中立性の主張はゴールに至るまでのあらゆる連関を無視した、メスのうまい使い手は危害を加えるのもうまいという文脈無視の主張にすぎ

ない。技術はその力能と不可離であり、力能はその当該ゴールにより秩序づけられる。犯罪用のメス使用の力能と治療用のメス使用の力能は異なるゴールの故に力の入れ方の微妙さの力能においてまたゴールに至る諸々の訓練により培われる力能において異なるものとなろう。原子爆弾の製造の力能も原子力発電所の製造の力能とは異なるゴールの故にその訓練の過程は異なり、力能としても異なるものとなろう。さらに、高密度の核力摘出技術は人類の幸福に至る力能として同定できるのか。双方を連関づけるべく、その距離を埋める壊れないロゴスの連鎖を生み出す知力と誠実さなしに、その力能が何であるかさえ知りえない。善を実現する力能であると誠実に立証しうるのか。

技術が向かう対象の善とはもちろん多義的である。しかし、第一に人間にとっての善とは「心魂のよくあること (eudaimonia=well-being)」としての幸福である。そしてそれは心魂の卓越性、徳に即した生以外のものではない。有徳な人間は悪を犯すことを意図することもなければそれをなし得ない人間であるとされる。力能が心魂の態勢として揺るぎない仕方こころで培われているからである。徳というこの豊かな心魂の形成に向けてのみあらゆる人間の活動は正しく秩序づけられる。幸福を望まないひとは誰もいないからである。

科学技術の中立性主張はこの統合的理解を阻む。科学技術の遂行であれ人間の産物がそれ自体として独立しているなら、天災のごとくに人間本性とは無関係なものとして位置付けられることになる。科学技術文明はひとにロボットスーツを着せ、手足、五感すべての機能を増強した。増強されたスーツにより、ひとの行動範囲は広がり自然を用い尽くすべく探求対象を広げた。しかし、このスーツは身の丈、心魂の丈こころにあっているのか。自ら増殖する技術は人間の心魂のスーツである必然性をもはやたぬ不定な何かである。

ひとは善への過程であったはずの科学技術文明に自らの心魂を引き渡す時、技術の論理が心魂の論理となってしまう。利便性や効率そして定量的な成果ロゴス、それが心魂の理法となってしまう。このスーツは心魂を包むものだったのではないか。「宝のあるところ心魂がある」(聖書)。「心魂の世話」が「最も大事なこと」(ソクラテス)であるのは、他の一切の営みがそれとの関係で理解され秩序づけられるからである。今回の危機はこの文明の脆さと剥き出

しの^{こころ}心魂の根源性を明らかにした。心魂はこれらの文明なしにも、自らが自らに向かう存在者として自らに出会っている。

心魂と科学技術の均衡点

心魂と科学技術の均衡点、黄金比を人類は理論理性（知性）と実践理性（道徳）、事実と価値、理性と信仰等の対比のなかで探求してきた。アリストテレスによれば心魂の卓越性、徳は認知的な態勢（状態）と人格的な態勢（状態）により構成されている。科学的知識や行為の選択に関する実践知（phronesis）等により形成される認知的に有徳なひとは賢者（sages）にまで至り、節制や勇氣そして正義や愛、高邁といった人格的に有徳なひとは聖者（saint）にまで至り、実質的には双方が調和しあう心魂の態勢が探求されてきた。

「実践知」は科学技術とそれを着こなす心魂の均衡点のひとつのモデルを提示している。理論知が開拓を続けるとき、適切なパトス（感情、欲求等身体の受動的な反応）との兼ね合いで発動する実践知（phronesis）が行為の知としてその技術化の行使の選択を判断する。自ずと湧きあがるものであり選択の外にあるパトスに対し「よい態勢」にある者は人格の上で「有徳者」と呼ばれる。正しいひとは怒らないのではなく、適切な時に適切な量の怒りがわきそして適切な仕方等で等しさを分配すべく行為を選択するひとである。正義をそれ自身の故に選択しそれを喜びとする。節度あるひとは快を差し控えることに喜びを感じるひとである。「知者は惑わず、仁者は憂えず」（論語）と言う。選択すべき行為がよく見えているひとは惑うことがないし、愛だけが善きものを生み出すことを知っているひとは憂えることがない。人格的徳と認知的徳は一方が正しい欲求として、他方が正しい行為の認識として相補的かつ相互制約的に発動する。人格的に有徳でなければ知りえないものがあり、選択すべき行為を知っているひとは適切な仕方等でパトスが生起しているひとである。

有徳な行為の訓練と習慣づけによってだけ身につく適切なパトスは心魂の態勢の「指標」である。どのようなパトスが湧くかによりそのひとの心魂の実力が判明する。この文明は科学技術の名に隠れて実は古い欲望（pleonex-

ia=より多く持つこと（パトスの一種）を崇拜していたのではないのか。悪は単調で退屈だ、新しいものが何もないから、質ではなくただ量がものを言う。知性が認可できないことを欲する人類とはなるほど天災である。この天災に負けぬ知性と人格の訓練により、心魂の態勢に即した自然なパトスの変化に人類の希望がある。パトスなき二進法計算機は塔の倒壊まで半鐘を打ち鳴らした消防士の行為を善と学習、認知できないであろう。それでもコンピュータに行動パターンを入力すれば原理的に可能だとひとは再び技術を無責任に崇拜するのだろうか。ここではパトスなきものは「原理的に」彼の行動を選択できまい、人格が育つまいと言い放っておこう。

人格と知性の相互^{かんにゅう}嵌入が人格のロボット化とその暴走をブロックする。パトスの過剰や麻痺を吟味するものも、また理論知の応用を行為として選択するものも心魂^{こころ}以外にない。前の戦争における総懺悔のパトスがこの国の方向を決めたように、「第二の敗戦」とされる今回の原発の非惨と啓蒙が新たなパトスを生み、この国の新しい方向を示すであろう。自らの産物を自ら管理、制御するのは心魂であり、この成長が人類最後の希望である。

日本のソフト復興案

今日までの日本の高等教育の大きな弱点は個別諸科学、諸技術における専門家の訓練と限界状況においても残る心魂の根底性との明確な関連付けである。またその基礎にある specialist と generalist の関連付けである。皮肉なことに「専門家」に相対する generalist には適切な訳語さえ見出し得ない現実がある。その意味の判明は後に期し、ここでは「教養人」と訳す。アリストテレスによれば「普遍的な教養人 (pepaideumenos)」とは個別諸学がこととする「真なるものがいかにあるかとは独立に」、どんな主題についてもきちんとものを考えることのできるひとのことである。「教養人は話し手が何を適切に語り、或いは適切にではなく語っているかについて滞りなく的を得た判断をすることができる」。教養人は自ら思考の方法を手にしており、「行き詰まり (aporia) を適切に提示する」ことにより思考を前進させる。何であれ解とは行き詰まりの解決であり、見たくない現実であっても、アポリアを明晰に

提示することなしに解に至ることはない。美しく問うことに基づく思考の力の涵養は伝統的に「自由人の学芸」に帰属する。ひとはこの訓練により知的営みは何であれ理解できるという自ら思考する自信と、思考の前進の実質を身につけた独立人となる。ひとは、何をしていても、善悪を判断する道徳的存在であり、法や経済等の制度的社会存在であり、栄養摂取代謝する生物的存在として重力や光の法則のもとにある物理的存在、さらには自らの存在と非存在について何らかの理解を持ち態度を取っている形而上的存在として、諸次元から構成される自己の総体である。「心魂の世話」や「心魂の耕作」(キケロ)と呼ばれた人間の一切の営みをそれとの関連において位置づける実存的な自己理解が総合的な人間を創る。教養人は対応する個別学を持つ諸次元における自己理解の送り返しのなかで統一の自覚を持つ自己としてやがて賢者、聖者となる。

知性と人格の相互的な訓練をこそ新しい日本の教育の根幹としたい。心魂と科学技術文明の関連づけという大枠の中で学習過程にあわせ教育題材を提供し、教養ある専門家を育てたい。教養人は知性の陶冶は人格の陶冶なしにはないということを明確に示し、専門家は諸学問が生活にいかにか密着したものであるかを伝える。教育の現場で心魂と専門の送り返しを続けるうちに、日本の津々浦々から目覚めた賢者や聖者が育ち、日本を支え、創りそして導くであろう。均衡をえた先人の叡知に学びつつ、人類のアポリアを解決する若者たちが登場するなら、この国は頼もしかろう。

Vision

新たな時代のアリストテレス、専門の閉塞した蛸壺部屋を開け放ち、美しい思考の模範を広く澄んだ青空のもとにわれらに示せ。

明日の^{あした}ペスタロッツ、あまりに古くさい知性と道徳の乖離を脱ぎ捨て、知性と人格は共に育つことの模範をわれらに示せ。

不屈のマルクスよ、搾取、疎外と支配からなる古びた済民経世の学を打ち捨てて、^{バトス}欲求の変化による需要供給曲線の堅固な交差域をわれらに示せ。

新たな時代のトモナガよ、老アインシュタインもお手上げの光の本性を知

るに至り、宇宙の諸力を秩序ある美しい一つの力となし、核力のより正しい知識をわれらに示せ。

明日のダーウィンよ、一兆個のデジタル記号からなるネオダーウィニズムの干からびた生物学を神話となし、自然選択とよく生きることに調和をもたらす目的論的生命の学をわれらに示せ。

不屈のエジソンよ、くたびれたプロメテウスの火を神々につき返し、雲から光から嵐から透明なエネルギーを得て、ひとと地球を新たに照らせ。

新たな時代のシェークスピア、「ワード、ワード、ワード」の瓦礫から言葉を救い出し、衷心へと潜り込み、そこから鋭いプリズム光を四方に放て。

明日のシキブよ、宿世ともののあわれのなかにも、ひととしての則が凜とあることをわれらに物語れ。

不屈のカントよ、「信」を「幸いなる誤謬」の懷疑から救い出し、心魂の道理ある根源語として正しい信のあることを論証せよ。

新たな時代のケンジ、雨にも負けず、風が空を吹き、その名残が草を吹くこの国に、未来圏から颯爽と吹いてくる清潔な透明な風を送れ。

明日のシンランよ、押し寄せる水流に解けた二人、手を自ら解いた老父、母求めさまよう少女、この絶望に襲われた心魂に、来世における再会の希望をしかと説け。

不屈のマリアよ、罪赦されたことの徴を多く愛しうることのなかに見出し、汝の父の御胸の憩いがどれほどの慰めであり、喜び希望であるかわれらに歌え。

新たな時代のリョーカンよ、朝日をあびて勤しむアリンコを祝し、輝くアルプスを前にどんぐりのように背丈を競う生きものをほほえみ包み、この惑星のあらゆる生命を慈しめ。

明日のレンタロウ、黒雲の悲しい気分を転調し、春の小川、れんげとすみれ、舞う蝶に、結んで開く小さな手、その向こうに輝く青空を奏でよ。

不屈のリンカーンよ、美しい島国にあって心魂の豊かさのもと誠実に自らの力能を発揮する秩序と慎みある社会のグランドデザインをわれらに示せ。